対外活動えの覚醒
下関南高との合同文化祭を

主張

今年も文化祭が例年のごとく行われた。毎年の事だが本校の文化祭は総合的にも実に無味乾燥の感が強いようだ。今年は本校の創立四十周年と相俟って相当盛り沢山のプログラムが予定されていたらしいのであるがそれでも華々しいとは言い難い様であった。生徒としては「一向文化祭という感じがしなかった」というのが現状ではなかったろうか。では我々は何処にその反省の余地を見い出す事ができるであろうか？第一に我々生徒自身にその責任が追求される事はもちろんだが、では現状においてこれ以上の生徒の〃自発的参加〃という事を期待できるかというと遺憾ながらそれは不可能に近いようである。ではこれを一体どう改善すべきなのであろうか？ここに到って我々は他校との合同文化祭なるものを提唱したい。そしてその相手校としては下関南高等学校をまず第一に考えなければなるまい。そもそも、その沿革史にも見られることく下関南高と本校とは前身が同一校の下関高等学校であることは諸君も既知の事であろう。

しかしそれが昭和二九年現在の様に分離してしまったのである。その時の事情はともかく離るべからずして（？）離れてしまった現在その最も縁の深い、いや一身同体とも言うべき下関南高をその相手校として第一に上げても何の異議もないであろう。では文化祭そのものについて考えてみよう。本校の現文化祭の欠陥を一口で指適するなら「出品作品の貧弱さ」にあると言っても過言ではあるまい。それは量的に見ても内容的に見ても明白な事実である。つまり出品作品を募集しても一向集らず集ったものはごく少くさらにその中から「多少なりとも優秀なものを」と或いはそうでなくても「あまりにも下らないものは除こう」と配慮しようものなら展示会の開催があやぶまれるかも分らない有様である。それで仕方なくそれらまでも一応堂々と出品してあるのだがそれはますます西高文化祭そのもののつまらなさを暴露に及んでいる。以上主に展示会部門について書いたが演劇部門を見ても出場人員、種目、の不足は十分伺い知ることができる。一部少数の熱心な生徒よって「どうにかその面目を保とうとしている」といった状態である。それがもし合同文化祭となると第一に生徒の文化祭に対する関心の自然的高揚する事は明らかであり応募作品とてそうお粗末なものを堂々と出品するというわけにも行くまい。作品の数とて現在よりはるかに多くなる事は疑いない。これらがその源を〃騎士道精神〃なるものに発しているかどうか？それは我々の知るかぎりではないのだがとにかく以上の様な観点から文化祭そのものの価値も相当向上すると見てまちがいあるまい。次に経費の面でも両校が各校別々に開催するよりずっと節約されるであろう。さらに我々が最も見逃してならない点はこの合同文化祭を通じて「お互いを理解する」という事である。目と鼻の先にありながら或いは前身は同一の高等学校でありながら両校の交流は全く「無」と言っていい現状である。そしてこの現状を打破する最上にして最短の方法が合同文化祭であると我々は確信する。学校内の各種活動（生徒会活動・クラス活動）や対外活動において沈滞をつづける現在、これを活発化する一つの手段としても十分価値あるものである。対外活動がいかに我々の高校生活を有意義な思い出あるものにするからは今さら説明を待たないであろう。さらに両校生徒の人間的交流によって得られる相互の人間的理解という貴重なる体験は我々の社会的教養を高める上に十分役立つものである。又誇張すれば習慣に従って惰性的にさへ行われて来た文化祭が、その性格を一変するであろう。なぜならその前提条件に両校の文化交流と学校諸活動活発化への点火、さらには両校生徒の人間的交流による相互理解という事があるからである。我々の手になる近代的センスを生かした、形破りの文化祭がここに誕生するのだ！何と素晴しい事ではないか。それは我々の「子に語る父の歴史」の誕生であり記念すべき一頁となりうるであろう。

（西高新聞論説委員長　貞国哲雄）

40年の伝統 歴史は何を語る？

〃天下第一関〃は西高の象徴であるが下関の象徴であると福田氏は述べられているが正にその通りである。人口二十四万の下関市と共に西高も着々と発展してきた。西高創立記念によせて福田下関市長は本紙の依頼に次のような所信を語られた。

西高創立記念によせて

福田泰三

下関西高が創立四十周年を迎えられましたことを心からお喜び申しあげます。

世の中にはいろいろな人もいて開校して四十年たてば四十周年を迎えるのは当り前の話ではないかという人もありますが、これは人間の場合でも同じことでこの世に生をうけた人がみながみな四十才に達することができるとは限らないわけでこれと同じく学校にしても四十年の歴史の中には幾度か危機と困難があったはずであります。大正九年市立中学として発足した本校がその後県立中学から県立高校となり、場所も壬司町から三遷して現在地にいたっているわけですがこの間には戦争から戦後にかけての激動の中に学制も幾度か大きく変化し、学校そのものも存在をゆるがすような変革を経て来たわけでありますがよくその危機をのりこえて四十周年を迎えたことはやはり意義深いことだと言わなければならないと思います。

本校の第一回の卒業生が漸く五十五才に達しこれに続く人々も各界において断然頭角を現わしはじめていることはまことに心強いところでありさらにそのあとをつがれる在校生の皆さんも学業に運動にあるいはその他にさかんな活動を行われ立派な成果をあげておられることは非常にたのもしいところであります。

しかし私としてはまだまだ皆さんにがんばっていただき本校のモットーとしておられる「天下第一関」のことばにはじない存在になっていただきたいと思うのでありますというのは私はこの「天下第一関」ということばに特別の意義をみとめるからであります。すなわち下関を象徴するのにこれほどふさわしいことばはないと確信しております。

二千年の昔から今日にいたるまで下関の果して来た役割はとりもなおさず「天下第一関」ということであります。たとえばたとえ一時的にしても豊浦宮として皇居がおかれたこと、源平の合戦がついに平家の滅亡という形で幕をとじたのも下関のことでありこれによって鎌倉幕府が出来、長い武家政治が行われたことを思い合せさらに明治維新に際してはそのもっとも重要な舞台となったことなど関連して極めて意味深いものがあります。

しかしさらに考えてみるとこのように要衝をしめており、日本の歴史の上に重大な位置をしめておりながら下関自体からは天下第一流の人物を余り出していないということは私にとってかねてからの不思議であり、残念にも思っていることでもあります。

「山水秀麗の気凝って偉人を生ず」ということばもあります。三面を海にかこまれた下関の自然の美しさはそうざらにあるものではないと思っております。文政九年出島の和蘭商館医官として甲比丹にしたがってやって来たシーボルトは関門海峡を通るときそのすばらしさに感激して、「フマン デル カペルレン」海峡と勝手に名命したりしているくらいです。

下関の歴史も自然もすぐれた人物を生み出す要素にめぐまれていないわけでもないと思いますが、しかも一流の人物に会しのは何故でしょうか。私は大いに皆さんの奮起を望みたいと思います。皆さんをとりまいている現実は必ずしも

先輩木村博士にインタビュー
スポーツは何でもこなす

先生の学歴は？

荒川先生の紹介のように壬江小学校、当時の下関中学校、山口高等学校、九州帝国大学の医学部です。

大学での専攻は？

昭和十一年に九大を卒業してから、九大の内科の第一、第二、第三の中、第一内科に入局して昨年一月迄居ました。それから久留米大学に第三内科をつくるというのでそこに移りました。

関中時代と現在の西高生との相違点は？

昔は小学校が今と同じ六年で中学が五年、それから高校でしたからね。それですから昔は、いろんな部に入って肩をいからせて歩いていたものですよ。まあ昔の方が大人っぽかったのではないですかね。

関中時代のどんな面が主に記憶に残っていますか？

あまり勉強の方は記憶に残っていないですね。なんといっても楽しかったのはクラブ活動ですね、今の方が盛んにクラブ活動をやっているようだが、昔は一生懸命というか、一つの事に打込んだような気がしますね。あまり打込みすぎて成績が悪くて学校を追いだされかかった人もいますね。そういう面でも現在の生徒とはちがいますね。純粋のというか、せまい意味の勉強は今の人の方がよくするね。学校は入るのにも昔は今程入りにくかったとは思わない。またそれ程無理をしなかったしその為の勉強もあまりしなかったね。その点今の学生は可哀そうだと思う。今だったら親も無理を言ったりしますからね。大学に入るのは自分のその調子で入ればいいんで、伸びるのは自分ですから自分の好きな所に入ればいいんじゃないかね。

当時の豊浦中学や、下商等に対する対抗意識はあったのですか？

大いにありましたね。それで豊浦、下商、関中の三校リーグ野球大会が始まったんだがね。あれは確か三年の時だったかな。まあ野球の方が町で喧嘩するよりよっぽどよいというので始めたんだが、本当に対抗意識に燃えていましたね。リーグ戦に勝ってから関中の野球が下関で認められるようになりましたね。

荒川先生—野球の応援団はすごかったね。鳴り物入りの応援でね、僕は今でも応援団をやっているよ。両校にも応援団あるのかね。

下商との仲が悪かったとか？

町で喧嘩したりなぐり合いなどもありました〃野球の時も対抗意識以上のものがありましたね。

先生の人生に対するモットーは？

むずかしい事をきくね。（笑声）昔は色々考えていたんだがね近頃はあまり考えないね。「四十にして惑わず」とか言うように今ではモットーを作らなくても大きく踏みはずすことは特にないね。まあとにかく人間は一人で離れ島に住んでいるわけでもないんだからいつも皆さんのお世話になっていて、その恩恵を受けっぱなしで終らないように、こちらが受けた以上のものを返したい。自分の専攻の面でも返したい。大きく言えば人類に貢献するというんだね。

趣味・娯楽は？

何でも一通りやってみるというのが一頃のモットーだったかも知れないね。今でもやっているのは、福岡にあるR・K・Bのレコードコンサートの解説、これを今から音楽を好きになろうとする人の為にと思ってやっている。映画もよく見ていたが近頃は久留米にいるから見る機会があまりないね。スポーツではラグビーが一番面白かったね。今でもやりたいんだが、体力が落ちてもう無理だね。今やったらけがするね。今だにやっているのは教室や病院対抗の野球でピンチヒッター、それもどうでもいい時のピンチヒッターだね。それからテニス硬球の方ね、これは今もやってるね。

小さい時からラジオに大変興味をおもちのようでしたが？

ディクトル心電図を考え出すに到った発端にまあなるんだろうけど、ラジオに興味を持ち始めたのは小学校の頃でね。最初は船のオペレーターをしていて体を悪くし陸に上ってラジオを組み立てている人がいたんだが、それを見ているうちに自分もやりたくなったんだね。

それではどうもありがとうございました。

写真は語る木村登博士

卒業生その後の動向をさぐる
職業別では 商工業へ進出

本校が誕生したのは大正九年、今から四十年の昔で、我等が誇る我等の先輩もその数を六千名近くに数えている。本校の歴史とは別に、ここでは先輩諸氏の今日の動勢をさぐってみよう。本校を天下第一関とうたわれるべく築きあげられた先輩の偉大なる努力と功績に敬意を表し、そして我々もその名にふさわしく努力しよう。

県下の他の高校と比較した場合本校はその経歴もだいぶ短く、卒業生数もずっと少いが、先日講師としてお招きした木村登博士を初めとし、現在多くの方面に活躍していらつしやる方を数多く送り出している。

本校における創立以来の卒業生は昨年度までに約六千名に及び、その歴代校長も十代校長である現山本校長に至るまで九人の先生×方を経てきている。

卒業生のうちわけをみると、下関中学校は大正十四年から昭和二十四年の間の二十五回で総計三〇五〇名、併設中学校時代では昭和二十三年、二十四年の二回で八十八名となっている。この併設中学校の卒業生が少いのは旧制中学校にとどまった者や、新制の高等学校へ進学したりした者が多かったからであろうか。昭和二十四年以後の新制高等学校、すなわち下関西高等学校の卒業生は十一回で約二八〇〇名となっている。

以下、卒業生の動きについて見ていくが、これは主に大正九年から昭和三十一年三月卒業までの先輩の動勢についてであり旭陵同窓会誌を参考にしたもので対象とした人数は総計五〇八六名である。

最初に先輩の地域的分布を府県別にみると、下関市内は別としてやはり九州最大の都市である福岡に在住している人が多く全体の五％を示している。下関市内に住んでいる人は六十五％にも上り、人口移動の激しいと思われる下関市において、反対に人口二十万の中都市の住みよさを示しているようである。そして下関以外の山口県内には十五％の先輩がおり、下関市にいる人と合計すると約八割もの人が郷土山口県に分布していることになる。

日本一の大都市東京都には、先輩の約三％がおり、大都会のけん騒とものすごい人の渦の中で活躍している。しかしこれは東京の総人口八百余万人に比較すると、その五万分の一にも満たらぬくらいの少数である。

これを大きく地方別にみてみると、中国地方に八十四％と大多数が集中しており、他に九州八％、関東四％、近畿三％となっておりその他の地方は残りの一％程度となっている。日韓問題が大きく話題になっている今日、朝鮮、台湾にもわずかではあるが、我々の先輩の居住がしるされている。

次に職業別にみてみよう。なんといっても多いのは公務員で全体の約二割にも及んでいる。中でも教職にたずさわっている人が多く公務員中の半数弱を占めている。我々が現在まで教わった先生方、また将来教えを仰ぐかもしれない先生方も沢山おられ、現在本校において教師として活躍しておられる方も多い。大学の教授、講師では第二回卒業の古谷九大講師、第四回の木村博士、村田山大教授、第六回大倉工学博士日大教授、その他多くの先輩を誇っている。

それにつづいて商業、そして工業関係者がそれぞれ教員と同じくらいの数を示している。それから金融、水産漁業、国鉄従業者が、おのおの教員の半数近くいる。

我が校の歴史はまだ浅いながらも、各方面での著名な人は少くない。試みに、下関中学校の部の同窓会誌をめくってみると、あちこちにその名が目につくのである。日本漁業界最大の大洋漁業、その姉妹会社である林兼産業の中部各氏も多く関中出身である。銀行の支店長や病院長も名をあげるにはだいぶ紙面をつぶしてしまうくらいいる。

下関市内に在住する先輩での多い主要分野といえば、やはり公務員で、下関市役所内だけでも表からわかるように六十四名という数をかぞえている。それから市内小・中学校教員がほぼそれと同爆続いて国鉄関係者も多い。それに大洋漁業、林兼造船、三菱造船という順序でつづいている。銀行などの金融関係にたずさわっている人も多く、山口銀行内にも二十名弱の先輩がおられる。また医師会歯科医師会に属している先輩も多く本校の学校医である荒川医学博士も関中第六回の卒業生である。四十年といえば人生においては壮年後期である。本校も先輩の築きあげた校風を今後ますます高めていくであろう。

卒業生内分

下関中学校	(卒業1回～25回)	3050名
併設中学校	(第3学年卒業生)	83
新制高等学校	(卒業1回～11回)	2850

主要職場別卒業生数

市役所	64名	三菱造船	21名
国鉄	59	山口銀行	18
大洋漁業	38	山陽電軌	17
市内中学校教員	36	門司税関	17
市内小学校教員	33	歯科医師会	16
医師会	27	下関大丸	9
27 林兼造船	27	電話局	7

(1956年発行旭陵同窓会誌による)

名誉大金賞状受領
厚生大臣賞受領
カステーラ
関門銘菓 大漁
下関市茶山口 虎屋 TEL②5479